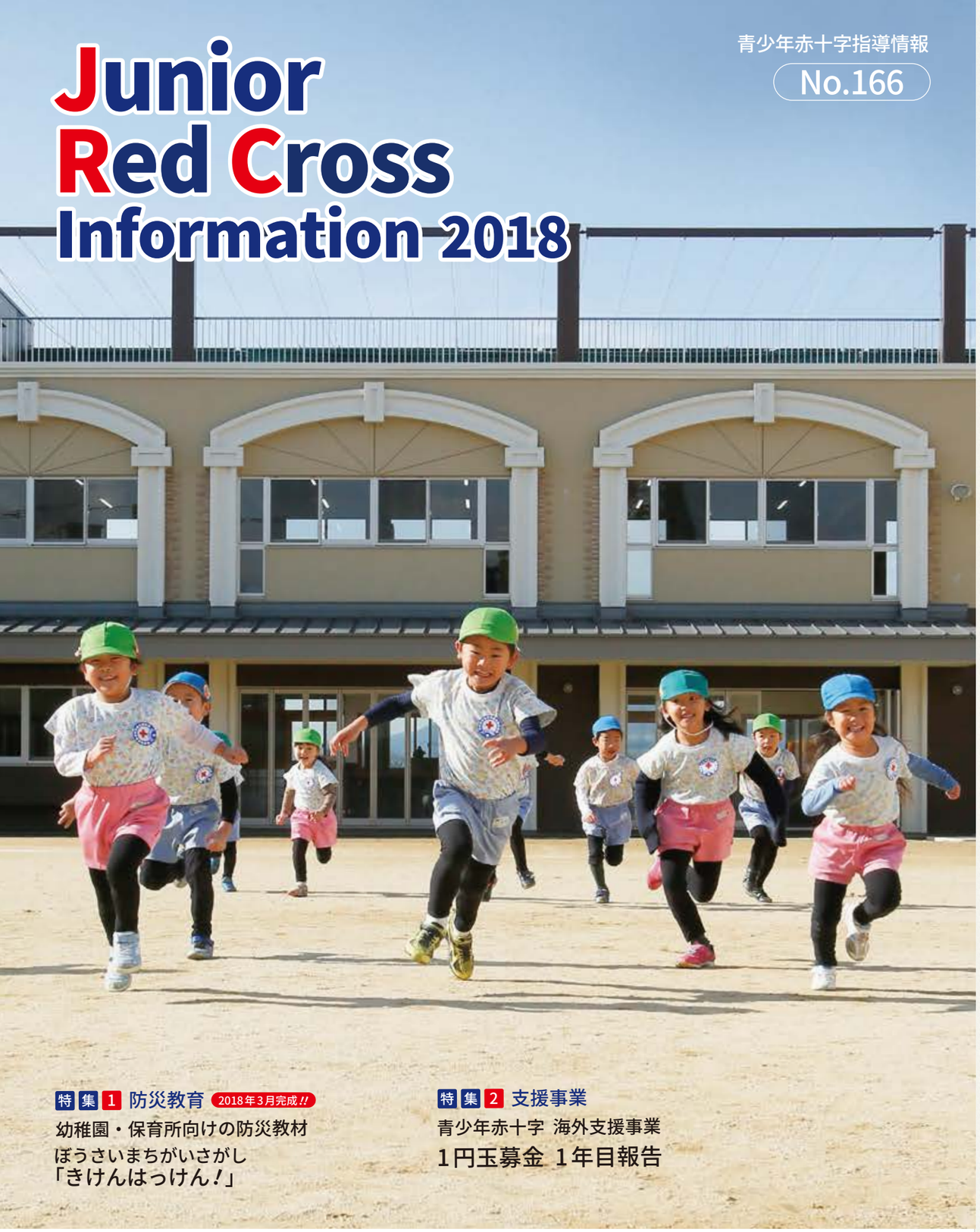
Junior Red Cross Information 2018

青少年赤十字指導情報
No.166



特集1 防災教育 2018年3月完成!!

幼稚園・保育所向けの防災教材
ぼうさいまちがいさがし
「きけんはっけん!」

特集2 支援事業

青少年赤十字 海外支援事業
1円玉募金 1年目報告

まもる いのち ひろめる ぼうさい

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。

アンケートにご協力ください!
https://questant.jp/q/1RNXX1X4

青少年赤十字活動に関するアンケートを行っています。このURLまたはQRコードからアンケートページにアクセスできますので、ぜひご協力ください。

平成30年8月31日までにアンケートにお答えいただいた方の中から抽選で30名様に赤十字オリジナルグッズをプレゼントいたします。

Junior Red Cross Information 2018
青少年赤十字指導情報　No.166

日本赤十字社　東京都港区芝大門1丁目1番3号
TEL. 03-3437-7082　FAX. 03-3432-5507　http://www.jrc.or.jp/

CONTENTS

Junior Red Cross Information 2018 No.166
【青少年赤十字指導情報】

1 TOP MESSAGE
「空は世界につづいてる　空は世界をだいている…」
全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会　会長　小川　忠彦

3 特集1 防災教育 2018年3月完成!!
幼稚園・保育所向けの防災教材
ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」

5 事例紹介
幼稚園・保育所向け
防災教材のトライアルを
熊本県で実施！

7 活用報告
防災教育教材
「まもるいのち ひろめるぼうさい」

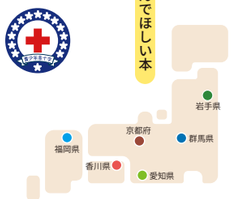
9 特集2 支援事業
青少年赤十字海外支援事業
1年目報告

11 インタビュー
言葉の力、音楽の力
まだ会ったことがない海の向こうの友だちへ
シンガーソングライター　伸太郎（しんたろう）

13 SPECIAL INTERVIEW
ジャーナリスト　大村　朋子

15 トレセン報告
国際理解は〝違いの尊重〟から！
青森トレセンの取組み

17 日本縦断活動紹介
各ブロックの取り組み × 子どもに読んでほしい本



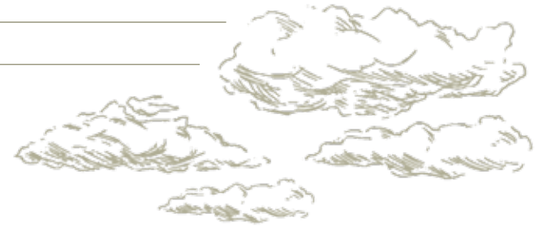
21 青少年赤十字（JRC）とは

22 コラム
90年ぶりに戻った
日本の子どもたちのアルバム

〈表紙協力〉JRC加盟校
学校法人愛和学苑 美鈴幼稚園

Junior Red Cross Information
2018.4.1 No.166
青少年赤十字指導情報
※本誌の内容は、原則として 2018 年 3 月 31 日時点のものです。

TOP MESSAGE



空は世界につづいてる
空は世界をだいている…

全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会
会長　小川　忠彦

終戦間もないころ、それまでの軍国主義的な教育制度の中で育ってきた私にとって、明るい未来を予言してくれているような、そんな清々しい気持ちでこの歌を歌っていました。広島県の島の新制中学1年生のときでした。補導者（指導者は当時そう呼ばれていた）研修会に参加されたらしい担任のK先生が、決して上手とはいえない歌声で私たち生徒に心を込めて教えてくださったのです。

教職に就き最初に赴任した学校が青少年赤十字加盟校で、登録式でこの歌が流れるのを聞いたとき、自身の中学生時代の記憶が鮮やかに蘇りました。

青少年赤十字活動は、子どもたちが赤十字の精神に基づいて世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから発足したものです。日本では大正11（1922）年、現在の滋賀県守山市立守山小学校で誕生して以来、第2次世界大戦で一時低迷したものの、平成29（2017）年で95年という歴史を数えています。

教員初任者時代から賛助奉仕団に身を置く現在まで、意識するしないに関わらず、自分の行動のどこかに赤十字・青少年赤十字の心が潜んでいるのではないかと、ふと考えることがあるのです。その源となっていたのは、情熱を持って指導いただいたK先生をはじめ、青少年赤十字活動に精励されてきた数多くの先達からの薫陶を受けてきた賜物と思い、感謝しております。赤十字の7原則、とりわけ人道を基盤とした活動が、この多様な現代社会の中で、教育現場でも大切な指針であると考えています。

“教育は人なり”という言葉を聞きます。日頃から青少年赤十字活動に携わっておられる多くの方々のご活躍にいつも深く敬意を払っているところですが、指導者自身、常に一層謙虚に自己研鑽に努め、子どもたちの健全育成に質するよう、励みたいと思っています。

空は世界へ

1
空は世界へ　つづいてる
空は世界を　だいている
みんなごらんよ　あの空を
空が僕らの　私らの
こころよ心よ　少年赤十字

2
花はだれにも匂ってる
花はやさしく匂ってる
みんなごらんよ　あの花を
花が　僕らの　私らの
すがたよ姿よ　少年赤十字

3
星はどこでも　光ってる
星は仲よく　光ってる
みんなごらんよ　あの星を
星が　僕らの　私らの
ほこりよ誇りよ　少年赤十字

4
旗は十字の　愛の旗
旗はかがやく　愛の旗
みんなごらんよ　あの旗を
旗が　僕らの　私らの
しるしよしるしよ　少年赤十字

2018年3月完成!!

幼稚園・保育所向けの防災教材 ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」

日本赤十字社は、児童・生徒が自然災害の学習と対策について主体的に取り組むための授業で使える教材「まもるいのち　ひろめるぼうさい」(平成26年度作成)に続いて、このたび幼稚園・保育所向けの防災教材ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」を作成しました。

ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」は、日本赤十字社が子ども向けの防災教材の豊富な実績を有する「NPO法人プラス・アーツ」と協同で作成した間違い探し形式の教材です。

企画・制作にあたっての過程で全国の幼稚園・保育所における災害対策等のヒアリングや教材試作品のトライアルを通して、子どもたちが楽しく、わかりやすく学べることを主眼に間違い探し形式のコンテンツを設計。間違い探しを楽しみながら学習指導要領・幼稚園教育要領に定められた防災分野での高い学習効果を実現する教材を目指しました。

教材が想定する対象は4～5歳(年中)以上で、少人数のグループでも、25～30人規模のクラスでも実施できます。子どもたちに教室など身近な環境を舞台にしたイラストを見せ、危険な場所や行動などを考えさせます。そしてもう一枚のイラストでもし危険につながる行動を取った場合にどのような結果になるかを見せて、子どもたちとのやり取りの中で理解を深めていきます。園児向けとしてこのように危険な行動をとった「結果」までを具体的に見せる教材はこれまでになく、「地震」「避難」「風水害」など目的に応じて様々なシチュエーションで学べることもこの教材の大きな特徴です。

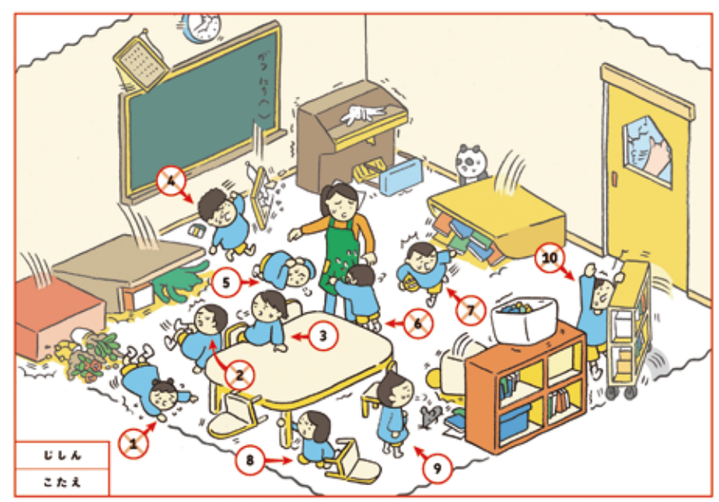
ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」3つの特徴

その1 楽しみながら防災を学べる

その2 災害時の行動による結果まで分かる

その3 テーマ別なので学びたい部分だけ実施可能

問題



答え

日本赤十字社×プラス・アーツ　協同作成の幼稚園・保育所向け防災教材

子どもたちの顔を思い浮かべながらのコンテンツづくりは楽しい経験でした。

向かって右から今回の教材開発に携わったNPO法人プラス・アーツスタッフ
小倉丈佳さん、坂本良子さん、清水聡子さん。

特定非営利活動法人プラス・アーツ
(東京事務所)
〒135-0021　東京都江東区白河3-7-6 白3木下ビル101
TEL：03-6458-5375　　FAX：03-6458-5376
URL：http://plus-arts.net
【主な事業内容】防災イベントの企画運営、防災教材の開発・販売など

私たちNPO法人プラス・アーツは、阪神・淡路大震災後、アートやデザインが持つ力を借りて社会的な課題を解決していくことを目的に神戸で設立されました。

私たちの防災教育に対するスタンスは「防災と言わない防災」。防災を特別なこととしてではなく、ふだんの生活の中で楽しみながら取り組める、いわば「防災の日常化」をめざしてきました。子どもたちに対しては、いつも遊んでいるおもちゃやゲームと同じ感覚で遊びながら学べる防災教材を開発したいと考えています。

今回、日本赤十字社とともに取り組んだ、ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」もそうした考えに基づくもの。子どもたちには間違い探しゲームを楽しみながら、万が一の災害時に安全に行動できるようになってほしいと思っています。

地震などの災害はいつ何時起きるか分かりません。もしかしたら子どもたちは災害時に親や先生の目が届かない場所にいる可能性もあります。そんな時に子どもが自らの判断で危険を避ける判断と行動をしてくれることを期待しながら私たちはコンテンツを練り上げていきました。

制作にあたっては、子どもたちが楽しめる「ゲーム性」とわかりやすさに特に留意しました。防災情報として伝えたいことは多いのですが、盛り込む情報が多すぎてもわかりにくい教材になってしまいます。その情報の取捨選択とバランスには気を遣いました。

プロのイラストレーターによる手描きのイラストは、子どもへのアピール力も強く、幼稚園での試作品トライアルなどでも好評でした。子どもたちが喜ぶ顔を思い浮かべながら、このイラストの力を十分に活かすコンテンツづくりを考えることは、私にとっても非常に楽しい経験でした。私たちの自信作をぜひ多くの幼稚園で活用していただきたいと思っています。

■ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」は避難、風水害、雪害など様々なシーンに合わせ、問題と答えが用意されています。

事例紹介

幼稚園・保育所向け防災教材のトライアルを熊本県で実施！

ふだんからの防災意識の重要性を私たちに突きつけた2016年4月の熊本地震。多大な被害が出た熊本市近郊にある二つの幼稚園で、完成直前の幼稚園・保育所向け防災教材ぼうさいまちがいさがし「きけんはっけん！」を実際に使っていただきました。

先生も園児も興味津々

まず訪れたのは、熊本市の北東、熊本県菊池郡菊陽町にある学校法人愛和学苑美鈴幼稚園。同園では熊本地震前から地域の消防との協力で防災訓練を行ったり、年齢別に色分けした大きな名前入りの防災ずきんを用意して、緊急時に全員がスムーズに避難できるようにするなど、災害への備えには積極的に取り組んできました。

「今回赤十字さんに提供していただいたのは、楽しみながら防災教育ができる教材。このような教材は初めてなので先生方も興味津々のようです」（野田園長）

トライアルは年長の園児を10人程度のグループに分け、先生方が紙を見せながらクイズを出す形式で行いました。「教室のどこが危ないと思う？」「危ないことをしているのは誰かな？」などと問いかけると、園児たちは元気よく一斉に手を挙げてイラストを指さします。前年の熊本地震の記憶がまだ鮮明に残っている年長の園児たちは、地震の際に教室で落ちてくるモノや倒れてくるモノから頭を守るという意識がしっかり根付いているようでした。実体験がない大雨による水害については、なかなか危険のポイントが把握できないようでしたが、そうしたケースでも「なぜこの場所は危ないのかな？」など、先生とのやり取りの中で自然と災害時に必要なことを学ぶことができていました。使っていただいた先生からも「子どもたちからたくさん言葉を引き出しながら教えられる、素晴らしい教材だと思いました」との感想をいただいています。

イラスト教材だから集中がとぎれない

次に訪問したのは、熊本市南区にある学校法人白藤学園力合幼稚園。こちらも園児たちが10名ほどのグループに分かれ、先生の簡単な説明の後、園児たちにイラスト中の「危ないと思う場所」「危ないことをやっている子」に星形のシールを貼ってもらうという形式でトライアルを行いました。教材を囲んで、身を乗り出しながらイラストの危ない箇所を指さす子どもたち……。同園でもふだんから避難訓練などの防災教育を実施しているので、子どもたちはイラストに描かれた危険な場所や行動にたくさん気付くことができたようでした。また、イラストに描き込まれたぬいぐるみや動物までしっかり楽しんでいる姿が印象的でした。

いずれの幼稚園の園児たちも、熊本地震を体験しており、中には自宅が壊れるなどの被害を受けた子どももいます。地震を思い出すことは、決して楽しいことではないでしょうが、今回の防災教材に対してはイラストの力と子どもたちの前向きな好奇心の相乗効果によって、子どもたちは楽しみながら防災教材を受け入れてくれました。

美鈴幼稚園

わくわくするね！

じしんだけじゃなく大雨もあぶないんだね！

まちの中ではどこがあぶないのかな？

たのしかったよ！

いっしょにおぼえたよ！

学校法人愛和学苑 美鈴幼稚園
園長　野田 久枝さんに聞きました

今回の教材は、園児たちに一方的に防災知識を教え込むのではなく、一人ひとりに考えさせ、答えを引き出す今までにないもので素晴らしいと思いました。これからも園で使っていきたいと思います。

力合幼稚園

わたしだったらどうするかな？

なぜこの場所からにげるのかな

この子、あぶないことをしてるよ！

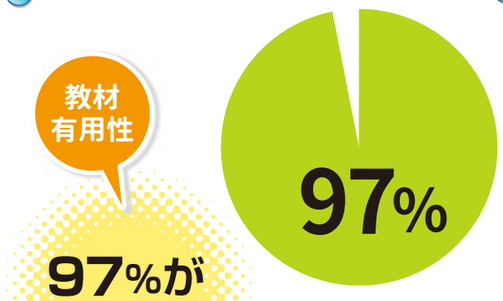
みんな色んなところに気がつくんだね

いざというときはあわてない！

活用報告 防災教育教材

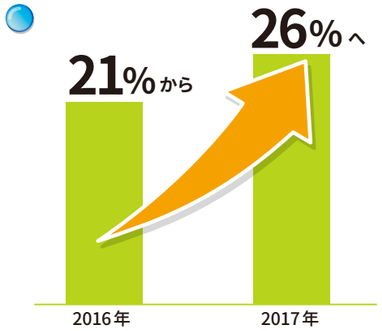
まもる いのち ひろめる ぼうさい

防災教育教材「まもるいのち ひろめるぼうさい」が教育現場で使われるようになって2年。日本赤十字社では、述べ11万5000部を無償配布し、小中高校での様々な活用事例が報告されています。まずは、配布2年目に行った活用に関するアンケートの結果を見てみましょう。



97%が有用性ありと回答

教材が届いたと回答した学校のうち97.3%が、防災教育や避難訓練などのために本教材が有用と考えています。



教材
活用率

21%が26%へ上昇！

アンケートに回答した学校のうち26.1%が、本教材を実際に授業や行事で活用。2016年の活用率(21.7%)と比べ4ポイント以上上昇したことになります。

熊本県上益城郡
山都町立矢部中学校
教諭 佐藤 貴文さん

この教材の良いところはすべての活動がよく考えて作られており、「児童・生徒が主体的に活動し、振り返りができるようにプログラムが仕組まれている」ことに尽きると思います。また指導案も自由にアレンジできるように幅を持たせてある点もよいと思います。熊本地震を経験し、この教材を通して子どもたちが学んだことを避難所で活用することができたという報告もあり、この教材の有用性がわかるかと思います。未来の被災者を一人でも減らすという日本赤十字社の思いがこの教材には凝縮されています。

調査概要
日本全国の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校4000校を対象にアンケートを配布、865校からの回答を基に集計を行った。

「まもるいのち ひろめるぼうさい」を使った授業も行う防災宿泊

2017年8月26日(土)～27日(日)
東京・武蔵野市立第五小学校

武蔵野市立第五小学校では、児童のお父さんたちの有志グループ「オヤジ倶楽部」が主催する「防災宿泊」を夏休み期間に開催しています。この「防災宿泊」は、地域の一時避難場所でもある小学校での1泊2日のプログラム。子どもたちの防災に対する知識と意識を高めることを目的として、みんなで防災米を食べたり、校庭に設置した防災風呂に入り、体育館で寝泊まりする体験をするといった活動を行ってきました。

第9回を迎えた2017年度は、初日に「まもるいのち ひろめるぼうさい」を使った防災学習を導入。日本赤十字社ではスタッフを講師として派遣し、低学年・高学年それぞれに向けた防災の授業を行いました。

当日の授業は、今後30年以内に約70%の確率で起こると予想される首都直下型地震の可能性を踏まえ、地震災害に絞った内容で行われました。そして、授業の締めくくりとして学んだ内容の「ふりかえりシート」への記入とともに、防災コミュニケーションワークショップ「ドローイング・チャレンジ」を実施しました。今回の授業とワークショップは、参加した児童たちにとって地震や防災について改めて考える良い機会になったようです。

防災授業

地震が起きるメカニズム、震度とマグニチュードの違い、地震が起きた際に自分の身をどうやって守ったらいいのかなど、DVD教材を交えながらの授業に聞き入る子ども達

開会式

開会式では主催スタッフと大きな声でご挨拶

ワークショップ

ペットボトルと水性マーカーで作った大きなペンを、各人の人さし指だけで支え、指示された図形や絵を描くというワークショップ「ドローイング・チャレンジ」

東日本大震災の前年から始まった「防災宿泊」。今回、初めて日赤さんの防災授業を受講したのですが、子どもたちが関心を持って取り組んでくれて良かった。今後も防災に関する日赤ならではノウハウを教えていただきたいですね。

武蔵野市立第五小学校
「オヤジ倶楽部」部長
斎藤興一さん

参加してみてどうでしたか？

児童

日赤の仕事を含めて、今日初めて知ったことが多かった。

これから自分でも地震や防災について調べてみたい。

地震が起きたら、自分のことだけでなく人のことも考えられるような人間になりたいと思った。

保護者

家庭ではほとんど地震防災について話したことはありません。今日は家族で話し合うよいキッカケになりました。

大地震で家族がバラバラになった際の集合場所を決めておかねばと思いました。

こうした親子で参加できる防災イベントは、何度もやってほしいですね。

青少年赤十字海外支援事業 1年目報告

青少年赤十字活動資金(通称「1円玉募金」)を活用した支援事業として平成29年4月よりスタートした「青少年赤十字海外支援事業」。支援の対象国であるネパール、バヌアツから、平成29年11月までの事業の進捗について報告が届きましたので、以下にご紹介させていただきます。

青少年赤十字海外支援事業

この支援事業は、青少年赤十字の実践目標を踏まえ、日本の青少年赤十字メンバーの奉仕精神を醸成して、対象国赤十字・赤新月社の青少年赤十字メンバーの健康・安全の確保を図り、国際理解・親善を促進することを目的に実施しています。平成29年4月から平成32年3月の3年間で、ネパール赤十字社、バヌアツ赤十字社を支援しています。事業は学校教育現場を通じた支援となるため子どもたちが活動の中心になり、主体的な担い手として事業に貢献することが期待されています。

日本の青少年赤十字メンバーが集める青少年赤十字活動資金(1円玉募金)が財源の一部として使用されています。

ネパール

ネパールでは、「持続可能な水と衛生プログラム」と題して、子どもたちが衛生的な行動を身につける知識と技術を得て、家庭やコミュニティに普及することを目指した支援を実施しています。

本事業が効果的に実施されるためには、あらゆる関係者の事業への理解がとても重要になってきます。事業対象地のシャンジャ、パルバトにおいて、3年間の事業概要説明と協力を呼びかけるミーティングが開かれました。参加したのは学校の校長、先生、生徒代表、教育委員会、郡支部長、郡支部の水衛生委員会メンバー、PTAの会長、地元の医師などです。さまざまな関係者がミーティングに参加したため、学校内のみならずコミュニティ全体が事業への理解を深めることができました。

バヌアツ

バヌアツでは、「学校における防災減災プログラム」と題して、公的に学校における災害リスクの軽減や防災の正しい知識を得る環境を整備することなどを目的とした支援を実施しています。

防災減災カリキュラムを効果的に作成・普及するため、平成29年4月にバヌアツ赤十字社はバヌアツ教育研修省とパートナーシップ協定を締結しました。これにより、赤十字を含む関係各機関と学校教育の現場において防災教育を推進することが公的に認められました。また、事業地の各島にある地方政府とも同様の協定を締結することができました。

青少年赤十字海外支援事業について

事業内容の説明を収録したパワーポイント、資料データを日本赤十字社各都道府県支部に配布しています。分かりやすいイラストも入っていますので、校内でも事業説明や募金活動の際には、ぜひお使いください。詳細は各都道府県支部青少年赤十字担当者までお問い合わせ下さい。

ネパール

ネパールでは、「持続可能な水と衛生プログラム」の取り組みが進められています。

平成29年6月5日〜11日はネパールの国民衛生運動週間で、子どもたちと地域社会住民の衛生意識の向上と実践の推進を目的にイベントが実施されました。子どもたちはキャンペーンの一環で、トレーニングや衛生ゲームを通じて手洗いや常に清潔を保つことの大切さを学び、また、11月19日の世界トイレの日に合わせて各家庭を訪問したり、トイレ掃除をしたりしました。青少年赤十字メンバーは、こうした衛生イベントやトレーニングを通して知識と技術を身につけ、自発的に学校のトイレや水道場の清掃活動を行っています。子どもたちが率先して自分たちでミーティングをし、地域の人たちにどう知識を広めていこうか話し合う様子も伺えました。

シャンジャ、パルバトでのミーティング・事業説明ではさまざまな関係者が参加した

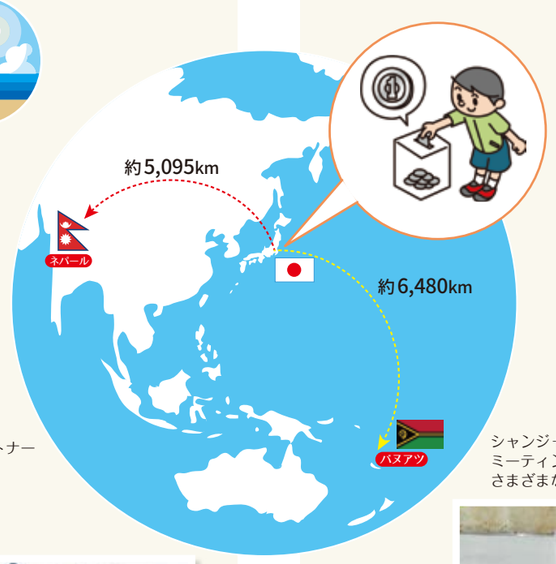
青少年赤十字メンバーの自発的な清掃活動

衛生イベントの様子

バヌアツ

平成29年9月末にアンバエ島で火山活動が活性化し、噴火の恐れがあったため、バヌアツ政府は約11,600人の全島民を一時島外へ避難させました。バヌアツ赤十字社はボランティアを動員し、救援物資の配布、避難所の管理などを行い島民の安全を確保しましたが、そこで活躍したのが事業で研修を受けたユースボランティア。このユースボランティアたちは、1週間にわたる研修を受け、防災マネジメントや救急法、リスクマッピングについて学び、実際に学校に赴いて子どもたちに防災知識を普及しています。

また、カリキュラムの内容について、関係機関とのミーティングが行われました。バヌアツは災害頻発国ですので、学校教育の現場において防災の知識を普及することについては、平成27年3月に被害をもたらしたサイクロン・パム以前から提案されていたことはありましたが、進捗は滞っていました。この海外支援事業を機に、他団体(Save the Childrenなど)とも協働して防災教育を普及していくような動きが再開し、カリキュラムの内容も検討されています。



バヌアツ教育研修省とのパートナーシップを締結

カリキュラムにかかるミーティング

研修を終えたユースボランティアが災害時に活躍

インタビュー

言葉の力、音楽の力

まだ会ったことがない海の向こうの友だちへ

山梨県を拠点に活躍する伸太郎さん。
2017年4月発売のシングル『心と心に虹を架けよう』は、地元小学校の子どもたちと一緒に歌詞を作った作品。CD売上の一部は「青少年赤十字海外支援事業」に寄付されています。
伸太郎さんに音楽活動のこと、支援先の子どもたちへの想いなどをうかがいました。

里垣小の皆とこの歌を
世界に届けたいと語る伸太郎さん

トップアーティストが参加した「フォークジャンボリー in IWAMIZAWA FINAL」に
オープニングアクトとして出演（上）。柏木現校長、佐野前校長とともに（下）

里垣小学校の音楽室で児童たちと。即興のライブに皆、引き込まれていく

人生にムダな経験などありません

生まれも育ちも山梨県甲府市。野球好きな親の影響で小学生の時から地域のチームで野球を始めて、県内強豪の高校（山梨学院高校）に野球特待生として進学しました。歌が好きだったので野球部の寮ではよくギターを弾いて歌っていました。ある時、野球部監督の悪口を歌にして野球部員に大ウケしていたのですが、たちまち監督にバレて（笑）。怒られるのかと覚悟していたら、監督は阿久悠先生に会わせてやろうと言うのです。驚きましたね。だってあの偉大な作詞家ですよ。大の野球好きであった阿久先生と監督は友人同士だったのです。

緊張しながら阿久先生と初対面。すると先生は「きみは自分で歌を作りなさい」と言われ、私はその言葉を信じて自作の曲を作り始めました。

高校卒業にあたって音楽活動の道に踏み出そうかと阿久先生に相談すると「卒業後、3年間は野球部のコーチをやれ」（笑）。「野球の中には人生のすべてがある」というのがその理由でしたが、まだ18歳の私にはピンと来ませんでした。でも今ならわかります。野球と出会い、山梨学院で監督や仲間と出会い、阿久悠先生と出会った。その後、地域の中で多くの方々にお世話になった。今の自分に至るまでのすべての出会いに意味があったと実感できます。人生にムダな経験など何一つありません。

子どもたちの〝想い〟を世界に

日本赤十字社とつながりを持てたのも、娘が通う里垣小学校の佐野寿満子校長先生（現・日本赤十字社山梨県支部、青少年赤十字担当）と出会ったことがきっかけでした。佐野校長からのお声がけで子どもたちと一緒につくったのが『心と心に虹を架けよう』です。まず里垣小の全児童にそれぞれの「想い」を直筆で書いてもらいました。言葉の内容もさることながら、筆圧や筆跡からも一人ひとりの気持ちがビンビンと伝わってきました。そうした一人ひとりの「想い」を大切にして歌詞をまとめ上げたのですが、2番の歌詞には「あなたには大きな夢がある…」と親の視点も入れました。親子で一緒に歌ってほしかったからです。

最終的に里垣小の音楽室に出向き、先生方の協力も得て曲を完成させました。この歌は正真正銘「里垣小」生まれなのです。CD化に際して売上を「青少年赤十字海外支援事業」に寄付することに決めたのは、佐野校長との縁もありましたが、何よりこの曲に込められた子どもたちの想いにもっともふさわしい寄付先だと思ったからです。この歌をいつの日かネパールやバヌアツの子どもたちと里垣小の子どもたちが一緒に歌うことができたら……。それが私の夢です。そしてその夢が実現した時こそこの歌がほんとうの意味で完成する時ではないかと思うのです。

PROFILE

シンガーソングライター
伸太郎（しんたろう）
1974年山梨県生まれ。地域を中心としたライブ活動を展開し、サッカー Jリーグヴァンフォーレ甲府公認応援歌、甲府市立善誘館小学校校歌などを制作。「やまなし大使」「八ヶ岳天空大使」も務める。また音楽療法士としても福祉施設などで活躍中。

里垣小6年生の子どもたちに聞きました。

『心と心に虹を架けよう』って どんな曲？

CD紹介

CDシングル
『心と心に虹を架けよう』
2014年、甲府市立里垣小学校の児童と一緒に制作した楽曲。その歌詞には、共に学び・共に生き・未来へ踏み出すという想いが込められています。

2017年春、東京で開催された国際赤十字主催のシンポジウムで、ファシリテーターを務めた大村朋子さん。NHK出身のバイリンガル司会者・ジャーナリストとして幅広く活躍中です。
帰国子女である大村さんが歩んだキャリアについてうかがい、これからの社会で女性がいきいきと輝くためのアドバイスをいただきました。

ジャーナリスト

大村 朋子

大村 朋子　Ohmura Tomoko
1960年福岡県生まれ。元NHK職員（記者／キャスター）。現在はフリーランスの立場でバイリンガル（日英）司会やモデレーター、国際放送の英語原稿をチェックする専門委員などの仕事をこなしている。

北九州人の両親のもとに生まれ 10代の大半をイスラム国家で過ごす

両親とも独立精神旺盛な北九州人で、私も生まれは北九州です。12歳の時にエンジニアだった父が海外へ赴任することになり、マレーシア・クアラルンプールへ家族とともに引っ越しました。そこで2年間暮らした後、15歳から今度はイランの首都テヘランで生活することに…。テヘランではアメリカンスクールに通っていましたが、18歳の時にイスラム革命が勃発。親米的なパーレビ国王が追放され、イスラム国家体制が築かれることになります。テヘランでは反政府運動の暴動に巻き込まれ、最後はエアフランス機でヨーロッパに脱出するというたいへんな経験もしました。でも、楽しい思い出もたくさんあり、私にとってテヘランは今も〝第二の故郷〟と思える町です。

マレーシアもイランもイスラム国家です。また私が52歳の時に夫の転勤により、娘とともに転居したインドネシアもイスラム教徒の多い国でした。そんなこともあって、最近、個人的にイランとの友好協会の集まりに参加しています。少しでも日本とイスラムをつなぐ役割を果たすことが、イスラム教と縁が深い私に与えられたミッションじゃないかと思えるのです。

この30年で大きく変化した 働く女性をめぐる労働環境

18歳で日本に帰国後はアメリカンスクールを経て上智大学に入学。就職では男性と伍して働ける職場として放送局を志望しました。NHKは私が就職する前年に初めて女性記者を採用したばかりで、私は女性記者二期生として入局できました。どこの取材現場に行っても女性は珍しがられましたが、「報道に女はいらない」「人寄せパンダだろう」という空気も感じていました。また、結婚後も旧姓のまま働いていたため、職場の各方面からお叱りを受けたりもしました。当時はメディアといえども女性に対する扱いはそんな感じでした。まだ不十分な面も多いですが、この30年で女性の労働環境は劇的に改善したと思います。

入局5年目に、当時の看板番組だった総合テレビ夜9時のニュース番組のキャスターに女性記者として初めて抜擢されました。その時のデスクが池上彰さん。当時からとても博識で、アイデアマンでもあり、ずいぶん助けていただいたことを覚えています。

キャスターもやりがいはありましたが、やはり現場に出る記者の仕事が好きでした。記者に戻ってからは在日ミャンマー人の民主化運動、日本初の国際AIDS会議、同性愛者への偏見、低用量ピル解禁など、それまであまりニュースにならなかった、でも私自身は大切だと感じた問題を伝えようと頑張って取材しました。報道を通して「困っている人を助けたい」という気持ちが仕事に向かう最大のモチベーションだったと思います。

誰とでも仲良くなれる力を身につけ 多くの若者に世界で活躍して欲しい！

先ほど触れた夫のインドネシア転勤を機に52歳でNHKを退職し、現在はフリーランスとしてこれまでのキャリアを活かした仕事をしています。

昨年4月には、赤十字国際委員会（ICRC）が主催する「国際社会で活躍する女性とは？」というテーマのシンポジウムでファシリテーターを務めさせていただきました。スピーカーとしてお招きしたのはICRC副総裁のクリスティーヌ・ベーリさん。女性としての人生を存分に楽しみながら、人道支援の現場などでハードな仕事をこなすその生き方に、私を含め会場の女性たちはとても勇気づけられました。

ICRC主催のシンポジウムでクリスティーヌ・ベーリさんと

私にも中学3年の娘がいますが、日本の子どもは〝親の期待に沿う有名大学に進学し、一流企業に就職するのが一番！〟という価値観で育てられることがまだ多いようです。でも、これからはどんな分野でも世界と競争し協調していく時代です。そこでは小さくまとまった優等生ではなく、語学力はもちろん、性別・人種や社会的規範に縛られず誰とでも仲良くなれる懐の広い人間力が大切になってくると思います。日本の若い方々には、もっと自分の「キャリア」に意識的になって、積極的に世界にチャレンジしてほしいですね。期待しています！

トレセン報告

国際理解は“違いの尊重”から！ 青森トレセンの取組み

「青少年赤十字高校リーダーシップ・トレーニング・センター（通称：トレセン）」は中学校・高校生を対象にしたリーダーシップを育成する研修プログラム。今回青森県では、県内16の高校から青少年赤十字メンバー約40名が参加。リーダーシップを身に付け、青少年赤十字活動のプロセス「気づき、考え、実行する」を実践してもらうことが狙いのこのプログラムを紹介します。

リーダーシップを身に付け、青少年赤十字活動のプロセス「気づき、考え、実行する」を実践してもらうことを目的に、3日間、様々なプログラムが行われた。

＼今回のテーマは／

国際理解・親善

研修プログラムは「国際理解・親善」のテーマで行われました。日本赤十字社の矢田結主事による講話では、同社の国際活動を説明したほか、高校生の夏休みにボランティア活動に初めて出会い、「自分の人生が変わるかもしれない」と感じたという自身の経験談を紹介。参加者に向けて、トレセンで学ぶことをこれからどう生きるかを考える際のヒントとしてほしいと語りました。

ゲームで国際理解を実感

張間亮講師によるグループワークでは、紙（資源）や道具（技術）を不平等に与えられた複数のグループ（国家）の間で、多くの富を築くことを競う「貿易ゲーム」を行いました。参加メンバーは、経済格差が拡大していく仕組みについてゲームを介して理解することができました。こうした活動を通して、国際理解について具体的に考え、身に付けることができたようです。

貿易ゲーム：「貿易」を軸として世界経済の動きを擬似体験することによって、さまざまな問題について学び、その解決の道について考えることを目的としたシミュレーションゲーム。

トレセン タイムテーブル

初日　13：00　開講式
14：00　講話「日本赤十字社の国際活動の現場」
15：30　オリエンテーション
16：10　ホームルーム
18：20　講義

2日目　6：00　起床
7：00　ホームルーム
7：20　朝の集い
8：40　先見
9：00　演習「貿易ゲーム」
13：00　スタディ・センター参加報告
13：30　体験学習
16：10　ワークショップ・オリエンテーション
18：20　ワークショップ

3日目　6：00　起床
7：00　ホームルーム
7：20　朝の集い
8：40　先見
9：30　ワークショップ発表会
11：30　感想文
13：00　開講式

生徒たちに伝えたいこと

「青森トレセン独自の取組みとしてテーマ制を導入した理由」

センター長・県立北斗高等学校
教諭　張間 亮さん

JRCの実践目標から1つを取り上げる“テーマ制”を昨年から始めました。トレセンに参加するメンバーに毎回違ったプログラムを提供したいということを理由に、防災、人道、国際理解・親善の3つのテーマを順番に回しています。今年のテーマは「国際理解・親善」。実践が難しい面もありますが、私は「目の前の違いの尊重」と捉えています。違いや共通点を見つけて互いに認め合い、交流を進めていくことが大切。参加メンバーには、失敗してもいいから自信を持って行動してほしいということを伝えたいですね。

「トレセンに参加してどうでしたか？」

今回初参加したのですが、ホームルームなどで自分の目標について発言すると、「いいね」「やってみなよ」といったように同意してもらえたのがとてもうれしく、刺激になりました。
（佐藤 美紅さん　八戸高等学校・1学年）

JRC活動は、自分の力で行動することを大切にしている点に魅力を感じます。もっと積極的になり、人の前に立って行動できるようになりたい。将来的には海外ボランティアをやってみたいですね。
（長内 珠都さん　青森中央高等学校・2学年）

今回の県トレ参加は、海外に目を向けるきっかけになりました。中学のころから学んでいる書道を通じて、海外の人たちともっと交流したい、日本文化の素晴らしさを紹介したい。将来は、そうした夢を実現させたいです。
（秋田 流有さん　青森南高等学校・1学年）

積極的な行動を促すアシスタントメンバー

講義・活動に集中して向き合えるよう参加者を支援するのが、高校生アシスタントメンバー。このアシスタント制は青森トレセン独自の取組みです。過去のトレセンに参加した経験のある青少年赤十字メンバー 10名、大学生のサブスタッフ2名が、初参加メンバーの取組みをサポートします。プログラムが滞りなく進行できるよう事前に入念な打ち合わせを行い、参加者の積極的な行動を促しました。

JRC活動への関心が強くなったのは、山中湖での研修がきっかけでした。その後、JRC活動を行うなかで、とくに募金活動での経験は心に深く刻み込まれています。「ありがとうございます」の声が本当にうれしかった。今回はアシスタントとしての参加ですので、参加メンバーにはそうした喜びも伝えたいです。

山中 来海さん
柴田女子高等学校・3学年

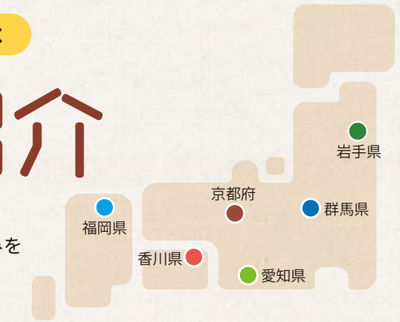
高校のトレセンに初参加したのは2年生の5月。アシスタントとしては、以前に地区トレで活動したのですが、その時はなぜかうまく動けなかった。今回、実はそのリベンジという意味もあります。同じ高校の後輩が参加しているので、しっかりサポートしてあげたいです。

小坂 朋也さん
八戸工業第一高等学校・3学年

各ブロックの取り組み × 子どもに読んでほしい本

日本縦断活動紹介

全国のＪＲＣ加盟校の中から、最新の取り組みをご紹介します。
ＪＲＣを積極的に活用し、児童・生徒の温かな心を育んでいる６つの取り組みをヒントに、日ごろのＪＲＣ活動や学校生活をますます充実させてください！



学校法人 内丸学園　幼保連携型認定こども園 盛岡幼稚園

IWATE 岩手県

坂本 信行 園長

思いやりの心の基盤育成

本園は明治40年に創立され、今年110年を迎えました。現在は幼保連携型認定こども園として、0歳児から就学前の乳幼児が就園しています。

本園では、園訓「つねによろこぶべし」のもと、一人ひとりの個性や発達段階を大事にし、家庭と協力して、健康で心豊かな乳幼児の育成を目指しています。目指す子ども像としては、身近な日常生活を通して、①自分の命と健康を大切にすること、②周りのお友達となかよくなれること、③集中して物事に取り組めること、④みんなの役に立つことをすることを掲げています。これは、こども赤十字のねらいとも相通じるものがあります。

こども赤十字に関連した活動としては、①健康・安全として、家庭と協力して早寝早起きの奨励、手洗やうがいの励行及び毎月のテーマを決めての避難訓練等、②感謝・奉仕として、花の日礼拝や花や野菜の世話及び食育と結び付けての収穫感謝祭等、③国際理解・親善として、赤十字社をはじめ4団体に募金するクリスマス献金や青い目の人形とのふれあい等があります。

あいさつ運動

青少年赤十字精神の基本は、自他を尊重する心や態度の育成にあると捉えています。他を思いやる心や態度の基盤には、まず「あいさつ」と「ありがとうの気持ち」の醸成と捉え、当園では「大人からの率先垂範」を合言葉にし、職員はもちろん保護者にも協力していただき取り組んでいます。この挨拶や感謝の気持ちの醸成は、園訓『つねによろこぶべし―いつもにこにこ』に通じるものがあります。

登録式

本園の目指す子ども像を子ども達に意識づけさせる機会として、こども赤十字の登録式を活用しています。登録式は年長組だけの行事で、毎年5月に実施しています。この時期は、進級できた喜びだけでなく、下級生を意識させることが大事と捉えています。登録式は、こども赤十字の目当てを確認し、毎年異なる内容での園長講話をします。例えば、絵本を読んであげたり、前の年の年長さんから受けた優しさを思い出し発表させたり、年中の時に発表した劇をふりかえったり、日赤岩手県支部より送られてきた啓発資料を使ったりして、自他を思いやることの大切さを話しています。そして、その気持ちを行動に結び付けられるように青少年赤十字のバッチを「やさしさバッチ」と称して、一人ひとりに手渡しています。

青い目の人形とのふれあい

青少年赤十字のねらいの一つに国際親善があります。盛岡幼稚園にはその国際親善の使節としてアメリカから贈られた「青い目の人形メリーちゃん」が大切に保管されています。

今、欧米ではアフリカからの避難民に対して受入反対運動がおきています。大正末期、これと同じようにアメリカで日本人移民反対運動が起きました。その際、この状況を憂い、アメリカから世界児童親善会を通して人形が日本各地の小学校や幼稚園に届けられました。ところが太平洋戦争で、人形は焼かれたり、壊されたりしましたが、盛岡幼稚園の職員はそれを憂い、倉庫に隠し保存しました。現在、その先人の思いを大切にし、「世界平和は子どもから」を合言葉に青い目の人形とのふれあいを行っています。

子どもに読んでほしい本

『だいじょうぶ　だいじょうぶ』
作・絵：いとうひろし　発行：講談社
心配しなくても「だいじょうぶ」。無理しなくても「だいじょうぶ」。それは、おじいちゃんのやさしいおまじない。

群馬県立太田フレックス高等学校

GUNMA 群馬県

石井 信行 校長

地域に貢献できる「ゴミレンジャー」

本校は、平成23年度より青少年赤十字に全校加盟しています。部活動や委員会としてJRCの活動はありませんが、生徒会が中心となって各種ボランティアや校内外の美化活動等を呼びかけ、学校全体で「奉仕」に取り組んでいます。定時制課程では、毎年５月に開催される生徒総会で、本校が青少年赤十字に全校加盟していることを生徒会長から全生徒に伝え、ボランティア活動等に際しての協力を呼びかけています。

具体的な活動としては、ノーチャイム運動、あいさつ運動、有志生徒による薬物乱用防止の啓発活動や献血を呼びかけるボランティア参加、学校全体で取り組んでいる「ゴミレンジャー」と称する地域清掃などがあります。「ゴミレンジャー」は生徒会美化委員が中心となって全生徒が参加し、軍手の色で５つの清掃コースに分けて実施されます。清掃中に地域の方に「ご苦労様」「ありがとうね」と声をかけていただくことがあり、生徒は励みに感じて頑張っています。

また、卒業予定者を対象に、日赤群馬県支部の方に依頼して防災教室を実施しています。生徒たちは、グループワークを通して災害への備えや安全への意識を向上させています。

2018年2月には、東毛地区で開催される薬物乱用防止推進大会において、本校生徒会が薬物乱用防止宣言文を朗読することになりました。今後も、赤十字活動を通して生徒たちが多くのことを学び、多くの人たちに貢献ができるような取り組みをしていきます。

子どもに読んでほしい本

「世界でもっとも貧しい大統領 ホセ・ムヒカの言葉」
著者：佐藤美由紀　発行：双葉社
世界中で問題となっている様々なことの根源は、現代人類の生き方が原因になっている趣旨のスピーチで、有名になったウルグアイ（南米）の元大統領ホセ・ムヒカ氏の生涯について、詳しく書かれています。

安城市立安城西中学校

AICHI 愛知県

濵﨑 大輔 先生

西中ブランド ―気づき、考え、実行する、「黙働清掃」―

本校では、「あいさつ」や「歌声」、「縦割り団活動」などの活動に積極的に取り組んでいます。これらの活動や活動に取り組む生徒の姿を「西中ブランド」と呼んでいます。

その西中ブランドの一つに、「黙働清掃」があります。この黙働清掃は、一つの学年で行っていた、話をせずに掃除をしようという「無言清掃」から始まりました。静かに掃除をできるようになると、「もっときれいにしよう」という声が上がるようになり、黙々と汚れに気づいて動く「黙動清掃」へ発展しました。この「黙動清掃」ができるようになってくると、「西中ブランドの一つとして、西中の誇りと思えるように、完璧に掃除しよう」、「全校に広めよう」という声が上がりました。そこで、黙々と進んで人のために働く「黙働清掃」という、今の掃除ができあがりました。今では全校にすっかり浸透し、伝統となりつつあります。

この黙働清掃では「黙働清掃かきくけこ」という目標を掲げています。「かきくけこ」の、「か」は輝かせる、「き」は「気づく」、「く」は「工夫」、「け」は「謙虚さ」、「こ」は「心を込めて感謝の気持ちを」、という内容です。これを各掃除箇所の掃除道具入れに掲示して、常に意識して清掃を行っています。

清掃時間開始のチャイムが鳴ると、黙働清掃が始まります。チャイムの前まで聞こえていた話し声がピタッと無くなり、床を磨く音、床のごみを掃く音など、静かな空間の中に掃除の音だけが響きます。生徒たちは、ただ「無言で」「動く」のではなく、周りの人のために、自分の担当場所の汚れている所に「気づき」、どのようにしたらきれいになるか「考え」、そして「実行」します。

今後も、青少年赤十字の実践目標の一つである、人のために「奉仕」する気持ちを育みながら、「気づき」「考え」「実行する」という態度目標を大切にして、主体的に行える黙働清掃にしていきたいです。

子どもに読んでほしい本

『まんがで学ぶ開発教育 世界と地球の困った現実』
著者：みなみ ななみ 編集：日本国際飢餓対策機構
世界と地球の問題について知ることができます。世界と地球の問題に気づいて、自分のできることを考え、そして行動してください。

高松市立勝賀中学校

KAGAWA 香川県

櫻木 拓 先生

地域貢献への第一歩

本校では「地域に貢献し、応援される学校」をめざし、生徒会本部が主体となって、校外清掃や地域行事でのうどん接待、防災活動などを行ってきました。その中で、生徒の「気づき」から新たな活動がはじまろうとしています。

本校の校区には、学校名の由来となった「勝賀山」という山があります。以前は近隣の小学校が遠足で登ったり、中学校の部活動のトレーニングで登ったりしていたこともあったようですが、往復2時間かかることや、かなりの急こう配であることなどから、次第に敬遠されるようになっていました。このようないきさつもあり、勝賀山への登頂経験がある生徒は、半数を下回っています。

ところが昨年度、この山に登る機会が偶然できました。生徒会本部に地域を調べて新聞を作成する依頼が舞い込んできたからです。そこで目を付けたのが勝賀山でした。調べていくうちに、山頂にある勝賀城跡が近年の山城ブームで注目を集めていることや、本格的な発掘調査がはじまったこと、地域の方が登山道の整備をしていることなどがわかりました。生徒会本部でも自分たちにできることを考え、清掃登山や、登山記念証を元旦に山頂で渡す手伝いをはじめました。勝賀山の魅力を探るため、4月にはお花見登山も企画しました。生徒は新聞に、「地域に貢献するには、まずは地域を知ることからはじめよう」とまとめており、勝賀山でのこれらの活動が、その第一歩となったところです。

このような活動を続けていると、生徒は思わぬところで地域の方から「ありがとう」とか「ご苦労様」など、感謝の言葉をかけていただいているようで、それが活動の励みや楽しさにつながっている様子です。地域への貢献が学校への応援につながり、それがやがて自分たちにもプラスに働くことを生徒も理解し始めたところです。

子どもに読んでほしい本

『竜馬がゆく』
著者：司馬遼太郎　発行：文藝春秋

幕末の大動乱期を、維新回天に向かってひたむきに駆けぬけた若者たちを描く長篇小説。「自分も何かしなくっちゃ!!」と考えずにはいられない、そんな本です。

粕屋町立仲原小学校

FUKUOKA 福岡県

大江 紀子 先生

地域ぐるみで取り組む防災活動

本校は、青少年赤十字に加盟して13年になります。青少年赤十字委員会の子どもたちを中心に、アルミ缶やプルタブ、ペットボトルキャップを集める活動をしています。また、7月末には、九州北部で起きた豪雨災害への募金活動も行いました。集まった金額の多さから、子どもたちの1日でも早い復興を願う気持ちや少しでも力になりたいという強い思いが伝わってきました。

しかしながら、子どもたちは、被害の様子をテレビ等のニュースで見聞きして知っており、自分たちもいつか避難することがあるかもしれないと不安に感じてはいるものの、自分たちが避難する場所を知らなかったり、避難準備をしていなかったりと、まだ痛切に危機感をもっている様子が見られません。そこで、「まもるいのち　ひろめるぼうさい」を使い、風水害（台風・豪雨）に関する防災教育授業を計画しました。

前半は、プログラムを活用して台風や豪雨の際に気をつけることや行動について学び、後半は粕屋町役場が作成した『仲原小学校区防災マップ』をもとに避難経路や避難場所について学習しました。防災マップには避難所はもちろん、地理的特徴からわかる地域ごとの防災ポイントや過去に浸水被害にあった場所など、防災に関する情報がたくさん記載されています。授業では、同じ通学路のグループで集まり、マップを見ながら、自分の家の近くの避難場所や、通学路などで冠水しやすい場所の確認ができました。町のホームページには、防災マップをはじめ、防災用品チェックリストなども掲載されているのでとても参考になりました。今後はホームページの活用を促したり、学習参観での防災教育授業を設定したりするなどして、保護者へ向けて、災害に備えるための啓発活動を広めていきます。

子どもに読んでほしい本

『みんなの防災えほん』
監修：村山武彦　絵：YUU　発行：PHP研究所

子どもたちにもっと防災の知識を持ってほしいと思い、購入し学級に置いています。災害（地震・台風・大雪・雷・竜巻・火事）がおこったときどうすればよいのかを、イラストとともに解説してくれています。

京都市立音羽小学校

KYOTO 京都府

豊田 寿美夫 校長
（京都市青少年赤十字教育研究会会長）

「子ども体験教室（ふれあいバスケットボール）」

京都市には市の青少年赤十字指導者協議会として、京都市青少年赤十字教育研究会があります。『子ども体験教室（ふれあいバスケットボール）』は本研究会の恒例行事です。例年、京都の車いすバスケットボールチームの“京都UPS（アップス）”の皆さんに講師をお願いして実施しています。

車いすバスケットボールは、障害の軽重に関わらずゲームに参加できる規定があり、すべての人が楽しめるスポーツです。もちろん障害がなくても一緒にできます。選手の方は「車いすバスケットボールは誰でもできる『車いすに乗った者のスポーツ』である。」とお話しされていました。

参加した子どもたちは、まずこの取り組みの意義を聞き、“京都UPS”の皆さんの模範ゲームを見せていただきながら、車いすバスケットボールのルールやゲームの仕方を教わりました。次に車いすに乗ってのシュート練習、車いすバスケットボールの交流ゲーム、また一般の車いすで校内を移動するといった3つのグループに分かれて“ふれあい”体験活動を行いました。

子どもたちは、初めこそ車いすの操作に戸惑いを見せていましたが、次第に扱い方にも慣れ、交流ゲームの２回目にはその上達ぶりが驚くほどでした。足のばねを使わない車いすでのシュートはなかなかゴールに届きませんでしたが、パスを回したり、車いすを精一杯動かしたりしてゲームを楽しんでいました。一般の車いす体験ではスロープや障害物のある所を実際に動かしてみることで、車いすで生活することの大変さを体で学びました。

最後に“京都UPS”の選手からお話を伺いました。交通事故で足に大けがを負った方は、事故の怖さを自らの体験から力を込めて語ってくれました。他の選手からは車いすを利用している者の困りごと（スロープをふさぐ自転車やガムの吐き捨てがあるとタイヤを通じて手に触ることなど）のお話がありました。

体験活動と選手の皆さんのお話を伺い、身体に障害のある人たちの日々の苦労やがんばり、またそれらの方たちへの理解が深まったと思います。一人ひとりが、何をすべきなのかを考えることができた、まさに『気づき、考え、実行する』を態度目標とする青少年赤十字にふさわしい取り組みになったと考えています。

子どもに読んでほしい本

『十歳のきみへ―九十五歳のわたしから』
著者：日野原重明　発行：冨山房インターナショナル

2017年に105歳で逝去された医師、日野原重明先生の著書です。子どもたちと会話するイメージで書かれた中には素敵な言葉がちりばめられています。「寿命とは、わたしたちにあたえられた時間のことです」「ほかの人のためにきみはどれだけの時間をつかっていますか」。自分の“いのち”について考えることができる素晴らしい本だと思います。

90年ぶりに戻った日本の子どもたちのアルバム

■ 国際交流に一役買った成績帖

1926年（大正15）に当時の滋賀県野洲郡の子どもたちが国際交流の一環として送った「成績帖」と題した交換アルバムがカナダ・カムループス市で見つかり、2017年2月に大津市の日本赤十字社滋賀県支部に届けられました。

成績帖は、野洲郡連合少年赤十字団に所属していた尋常小学校、高等小学校の子どもたちの作文や絵画、習字など作品約50点を収録したアルバム。日常生活の様子や日本の素晴らしさを紹介した作文をはじめ、雪だるま近江富士、かるた遊びや軍艦を描いた絵画、「清湖」「努力」などと書いた習字が載り、縦24センチ、横33センチ、53ページの和本にとじられています。

これまで成績帖は、カムループス市にある日系文化会館史料館で日系人関係の詳細不明資料として保管されていました。史料館に勤務する新納あんぬさんが、序文や絵などを手掛かりに発信元を突き止め、野洲市を通じて日赤滋賀県支部へ届けられたものです。

日赤滋賀県支部に戻るまでを伝える新聞記事

■ 少年赤十字団の歴史を示す資料

少年赤十字団の活動は、現在の守山市立守山小学校で1922（大正11）年に始まりました。日赤滋賀県支部が1933（昭和8）年に刊行した支部誌によると、滋賀県内の子どもたちが手紙などを通じて外国の児童との交流が始まったのは1923年。ピークの26年には滋賀県から欧米などに75回交換アルバムなどを贈った記録が残っています。活動は全国に広がっていきましたが、海を渡ったアルバムは日赤本社にも残っていなかったため、詳細についてはよく分かりませんでした。

この成績帖は少年赤十字団の活動の歴史の一端を示す貴重な資料だといえます。今後、成績帖は赤十字情報プラザ（東京都港区）で展示される予定です。

カナダ・カムループス市で見つかった交換アルバム

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society × BOOK・OFF Online

“ボランティア宅本便”、平成30年4月から利用開始！

学校や家庭で不要になった本やCDを、赤十字の活動に役立てませんか？

回収時送料無料！！

ボランティア宅本便　赤十字

＊詳しくは、専用サイトをご覧ください
http://www.bookoff-online.jp/alliance/jrc-or.html

支援の流れ

- STEP 1 箱詰めする：本やCD、DVDやゲームを箱に詰めます。
- STEP 2 お申し込み：専用の申し込みフォームから申し込みます。
- STEP 3 集荷を待つ：佐川急便のドライバーが無料で集荷に伺います。
- STEP 4 寄付先へ送金：日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　ブックオフオンラインで査定し、買取金額を寄付として送金します。

〈青少年赤十字（JRC）とは〉

はじまり

子どもたちの「気づき」をきっかけに

第一次世界大戦のとき、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙やプレゼントなどを赤十字を通じて届けました。

これがきっかけとなり、青少年赤十字が誕生しました。

人道的な価値観を世界の子どもたちへ

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟（現在の国際赤十字・赤新月社連盟）は1922年に青少年赤十字を創設することを決めました。日本の青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山尋常高等小学校（現在の守山市立守山小学校）に誕生した「少年赤十字」から数えて90年以上の長い歴史をもっています。

青少年赤十字が大切にしていること

青少年赤十字の実践目標

- **健康・安全**　生命と健康を大切にする
- **奉仕**　人間として社会のため、人のために尽くす責任を自覚し、実行する
- **国際理解・親善**　広く世界の青少年を知り、仲良く助け合う精神を養う

青少年赤十字の態度目標

- **気づき**　身近な問題を発見する
- **考え**　問題解決のための道筋や方法を探る
- **実行する**　活動に取り組み、評価と反省を次へ活かす

青少年赤十字の導入・活用のメリット

赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

青少年赤十字の活動は、子どもたちの思考力・判断力・表現力を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。

赤十字には、人間の命と健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、存分にご活用ください。

加盟校数 **1万3,857**校　　メンバー数 **328万6,052**人

加盟校数・メンバー数ともに2017年3月現在

全国47都道府県のすべてにある日本赤十字社の支部が、教育現場での青少年赤十字活動を、ご要望に応じてきめ細かくサポートします。加盟登録の方法や、各種教材の貸出し、講師の派遣などに関する詳細をご希望の場合は、お近くの支部の青少年赤十字担当者へお気軽にお問い合わせください！

日本赤十字社（都道府県名）支部　検索

『青少年赤十字指導情報』は、日本赤十字社のホームページからダウンロードすることもできます。
http://www.jrc.or.jp/activity/youth/document/

青少年赤十字の目的や参加することによるメリットのほか、講師派遣や貸出しできる資材等を紹介するパンフレット冊子。
（日本赤十字社東京都支部の例）

■青少年赤十字加盟校のためのメニュー 一覧
http://www.tokyo.jrc.or.jp/junior/file/memberschool_menu.pdf